

## 大学教育学会 課題研究活動報告書 (2020 年度)

提出日 2021 年 3 月 27 日

報告者 山田嘉徳

課題研究テーマ	大学教育における質的研究の可能性
代表者 (所属)	山田嘉徳 (大阪産業大学)
メンバー (所属)	上島洋佑 (新潟大学), 森朋子 (桐蔭横浜大学), 山咲博昭 (広島市立大学), 谷美奈 (帝塚山大学), 山路茜 (立教大学), 西野毅朗 (京都橘大学), 服部憲児 (京都大学)
担当理事 (顧問)	森朋子 (桐蔭横浜大学)
コメンテーター (所属)	佐藤浩章 (大阪大学)
実施した活動	<p>本課題研究では大学教育を対象とする優れた質的研究の事例収集と質的研究のあり方を探る方法的検討を行うことによって、大学教育における質的研究法の確立に向けた知見の提起を目指す。</p> <p>本年度は、(1)文献調査、(2)質的調査、(3)研究者間のネットワーク構築という3つの活動を実施した。(1)では、大学教育を研究対象とする主要な学会の近年の研究動向を踏まえ、大学教育を対象とする質的研究に焦点をあて、その特長や課題を探るための調査を実施した。<u>大学教育を対象とする研究論文延べ552本のうち、177本の質的研究論文について、研究デザインに焦点を当てて方法論的な議論を展開した。</u>(2)では、アンケートなどの量的調査では把握しきれない、大学生の生の声を質的研究者がインタビューを通して掬い上げ、大学界だけでなく社会全体に届けることが重要であるという考えのもと、<u>2020年10月末から11月初旬にかけて大学1年生から4年生の延べ20名を対象とした『『コロナ禍における学生の学び』の質的調査』を実施した。</u>本調査の知見は、<u>文部科学教育通信連載「コロナ禍における大学生の声をきく—質的研究者たちの挑戦」</u>を通じ、一般向けに公開も進めた。(3)については、初年度は下記の通り、<u>ホームページ上で研究成果の公開を進め、次年度以降の活動に向けたネットワーク構築のための準備を進めた。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 山田嘉徳・上島洋佑・森朋子・山咲博昭・谷美奈・山路茜・西野毅朗・服部憲児 (2020). 『大学教育学会 課題研究 (2020 年-2023 年) 大学教育における質的研究の可能性』 (<a href="https://sites.google.com/view/jacue-qualitative-research">https://sites.google.com/view/jacue-qualitative-research</a>)</li> </ul>

<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大学教育学会第 42 回ラウンドテーブル (2020 年度 6 月 6 日@九州大学オンライン開催)「ラウンドテーブル報告 大学教育における質的研究の多様な展開」</li> <li>● 『大学教育学会誌』第 42 巻第 2 号〈ラウンドテーブル報告〉山田嘉徳・上島洋佑・森朋子・山咲博昭・谷美奈・山路茜・西野毅朗・服部憲児 (2020). 「ラウンドテーブル報告 大学教育における質的研究の多様な展開」</li> <li>● 大学教育学会 2020 年度課題研究集会課題研究シンポジウムⅡ (2020 年度 11 月 29 日@早稲田大学オンライン開催)「大学教育における質的研究の可能性」</li> <li>● 山田嘉徳「大学教育における質的研究の可能性—課題研究の目的と研究課題の整理—」</li> <li>● 山田嘉徳・上島洋佑・森朋子・山咲博昭・谷美奈・山路茜・西野毅朗・服部憲児「大学教育を対象とした質的研究の文献調査」</li> <li>● 上島洋佑・山田嘉徳・森朋子・山咲博昭・谷美奈・山路茜・西野毅朗・服部憲児「質的アプローチが明らかにしたコロナ禍における学生の学びの様相」</li> <li>● 文部科学教育通信 (全 13 回連載の内, 下記の第 1 回から第 8 回までが刊行済み) <ul style="list-style-type: none"> <li>第 1 回 山田嘉徳「プロジェクトの趣旨」 No.497</li> <li>第 2 回 上島洋佑『「コロナ禍における学生の学び」の質的調査の概要」 No.498</li> <li>第 3 回 上島洋佑「オンライン授業は続けるべきか？」 No.499</li> <li>第 4 回 谷美奈「コロナは学生のキャリアイメージにどのような影響を与えたか」 No.500</li> <li>第 5 回 谷美奈 「コロナ禍における学生の授業経験とその真意」 No.501</li> <li>第 6 回 山路茜 「オンライン授業で学生はどのように質問したか」 No.502</li> <li>第 7 回 西野毅朗 「“ゼミ”の遠隔化が人間関係に与えた影響」 No.503</li> <li>第 8 回 服部憲児「コロナ禍における授業課題—学生の捉え方・対処法と大学教育への示唆—」 No.504</li> </ul> </li> </ul>
<p>残された課題</p>	<p>2020 年度の活動を通じて、大学教育研究における混合研究法の議論を精緻にしていく研究課題が新たに浮上した。そこで会員のニーズの高い大学教育における実践研究のための方法論の一つとして、混合研究法を取り上げ、この可能性を中心に探っていく。また、本年度の質的調査の活動の振り返りを通して明らかになった、質的研究を実践する上での要点について議論を継続するとともに、そこで明らかにされた改善点を踏まえて 2021 年度も質的調査法を取り入れた学生調査を継続して実施する。</p> <p>加えて、これから質的研究に取り組もうとする人を対象に、本課題研究で得た具体的なデータを踏まえながら、質的調査・分析を行う上での参考となる指針やその学び合いの場を提供していく。</p>